

木簡字典

文字は、時代や地域によっても様々な書かれ方をします。そこで、古文書や木簡を読むときには様々な形の文字を集めた「字書」が必携です。日本古代木簡から字書をつくることは、私たちの「宿願」でした。こうした課題に、答えようとした最初の試みが「木簡画像データベース・木簡字典」です。優れたデータベースとして大変好評ですが、インターネットに接続しないと利用できない、という問題があります。やはり、ハンディな冊子体の字書も必要だ、ということで『日本古代木簡字典』を編集することになりました。

木簡から字書を編集する際には、大きな障害があります。木簡の文字は、紙に書かれた文字に比べて不鮮明なので、鮮明に印刷することが困難です。文字の不鮮明な字書では、役に立ちません。そこで今回は、まず木簡の写真原版を高精度でデジタルデータ化しました。次に、コンピュータで、これらの写真データから一文字ずつの画像データを作成し、さらに徹底的に鮮明化処理をおこないました。一文字ずつ、木簡の文字の持つ雰囲気もなくさないよう、丁寧に作業を進めます。墨を追加するようなことはおこなっていません。こうした作業によって、生の木簡の文字をそのまま鮮明にして、利用者に提供することができました。

文字の選択は日頃から木簡釈読に従事するスタッフがおこない、できるだけ多様な字形を集めました。約1000字種・5000文字を収録しており、日本古代木簡の文字のほとんどの部分をカバーすることができたと自負しています。また、八木書店から市販もされ、売れ行きも好調な様子です（2,310円 税込）。

ぜひとも多くの方にご利用いただき、かつご意見を頂戴してよりよい字書へと進化させていきたいと考えています。（都城発掘調査部 馬場 基）



完成した『日本古代木簡字典』

隋唐墓出土副葬品の調査

遼寧省文物考古研究所との共同研究では、2006年度から遼寧省の隋唐墓出土副葬品の調査・整理・研究をおこなっていますが、本年度も10月ならびに来年3月に遼寧省瀋陽市での調査を予定しています。それに先立ち、遼寧省文物考古研究所を訪問し、田立坤所長と今年度の具体的な調査計画について協議しました。今年度は特に、理化学的分析調査も計画しており、その準備を進めているところです。

それに関連して、昨年度2月に天理大学附属天理参考館のご協力を得て、天理参考館所蔵の陶俑^{とうよう}を調査しました。これは現地での本格的な調査の下準備を兼ねて、主として熟覧による調書作成や写真撮影をおこないました。今年度は6月23・24日の2日間にわたり、所外の研究者も含めて7名の調査者で、蛍光X線分析やマイクロスコープによる観察、赤外線写真撮影と3Dデジタイザによる計測をおこないました。

天理参考館所蔵の陶俑には、駱駝・猪・犬・牛などの動物俑や、甲冑武人・胡人・文官などの人物俑というように、様々なものがありますが、今回はそれらのうち15点の陶俑について調査し、分析結果を現在、解析、整理しているところです。

これらの資料は、遼寧省朝陽市隋唐墓出土陶俑によく似ており、産地が同じものも含まれているのではないかと思います。10月に予定している瀋陽市での調査でも同様の分析調査を計画しており、今回の天理参考館所蔵品の分析結果と、遼寧省出土品の分析結果との比較から、何か興味ある事実が明らかになるのではないかと期待しています。また今回、新型の携帯式蛍光X線分析装置も試験的に使用して、その実用性を確かめるために、従来型の小型蛍光X線分析装置の分析結果との比較もおこなっているところです。（企画調整部 小池 伸彦）



3Dデジタイザによる駱駝俑の計測